

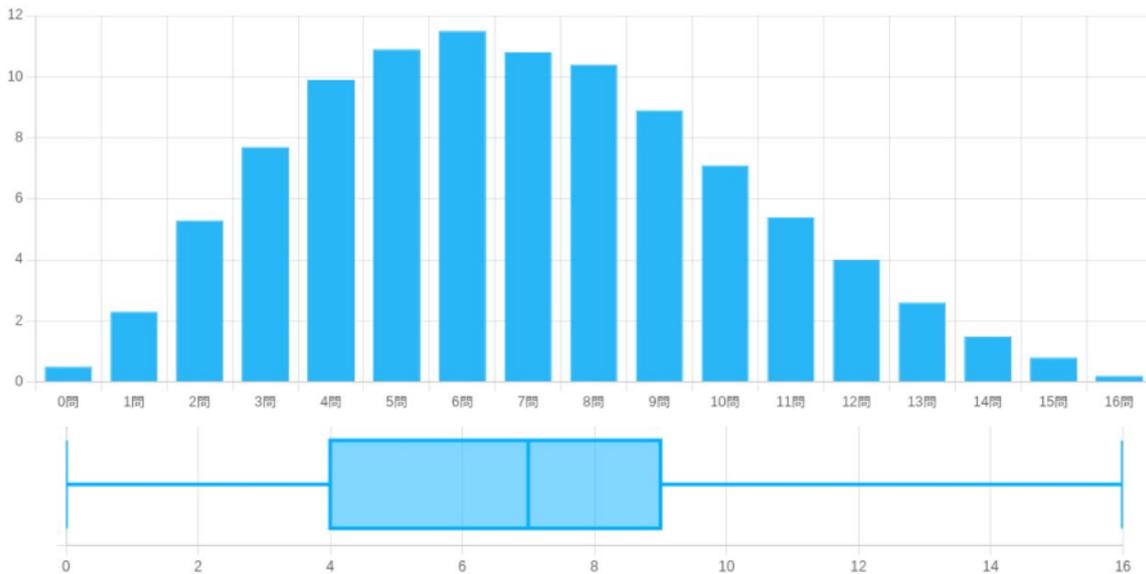
3 算数・数学

小学校第5学年【算数】

(1) 平均正答数, 平均正答率

学年別 平均正答率	学年	小5	【参考】中1	【参考】中2
	知識・技能	3.4 / 8問 (42.8%)	60.6%	48.0%
	思考・判断・表現	3.5 / 8問 (43.2%)	34.4%	25.8%
全体	6.9 / 16問 (43.0%) スコア 468	7.6 / 16問 (47.5%) スコア 500	6.3 / 18問 (36.9%) スコア 516	

(2) 正答数分布, 正答数ごとの層分布

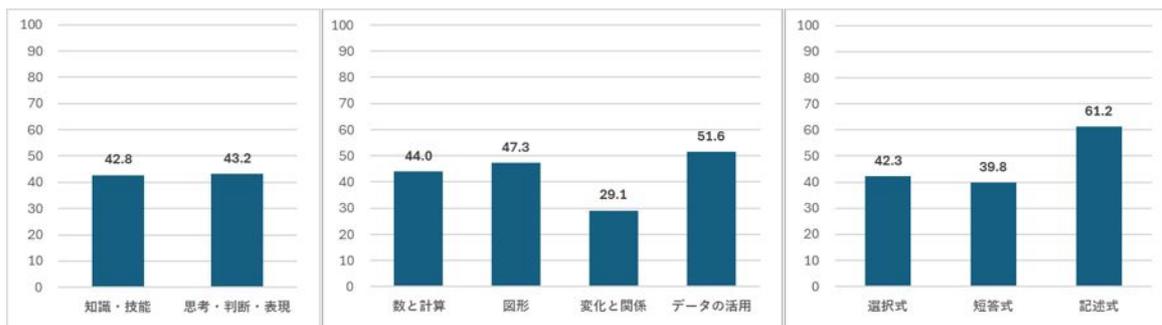


	D層	C層	B層	A層
県分布	0~3問 (15.8%)	4~6問 (32.3%)	7~8問 (21.2%)	9~16問 (30.5%)
自校分布	0~ 問 (. %)	~ 問 (. %)	~ 問 (. %)	~16問 (. %)

	県	自校
中央値	7.0	
標準偏差	3.2	

(3) 平均正答率（観点別，領域別，問題形式別）

小学校 第5学年	区分	問題数	平均正答率(%)	
			R7	自校
	全体	16	43.0	
観点	知識・技能	8	42.8	
	思考・判断・表現	8	43.2	
領域	数と計算	4	44.0	
	図形	4	47.3	
	変化と関係	4	29.1	
	データの活用	4	51.6	
問題形式	選択式	12	42.3	
	短答式	3	39.8	
	記述式	1	61.2	



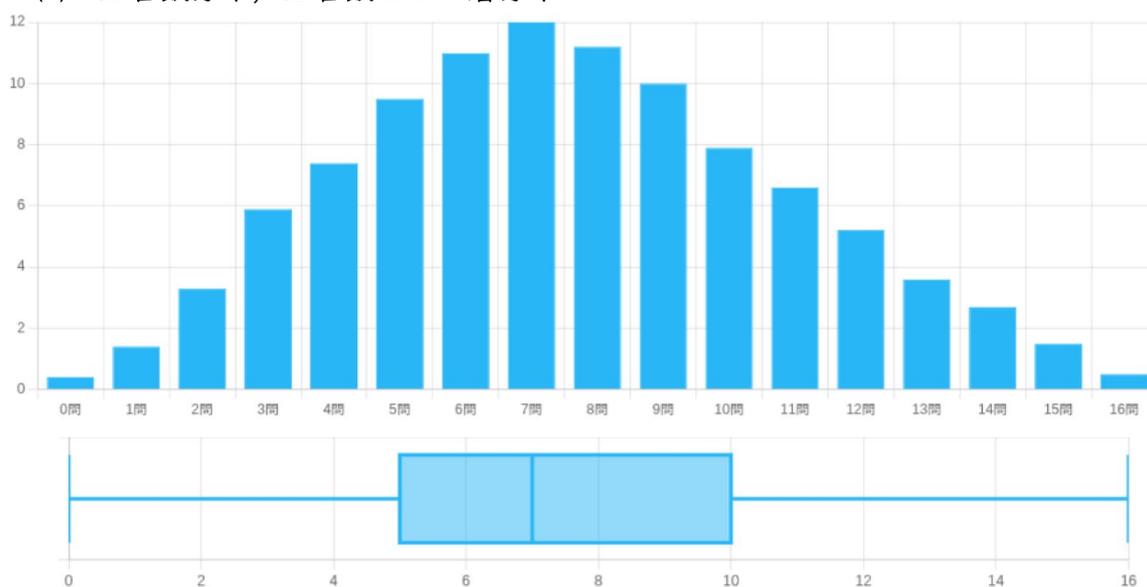
- 小学校第5学年算数の全体正答率は、43.0%（6.9/16問）という結果となっています。「知識・技能」42.8%と「思考・判断・表現」43.2%はほぼ同水準であり、どちらか一方に偏った課題というより、算数全体としての定着・活用の弱さが見られると言えます。
- 標準偏差は3.2と、ばらつきは極端に大きくありません。各学力層の分布状況を見ると、A層（学力上位層）は9～16問と幅広い範囲に分布しており、上位層の中でも得点差が見られます。一方、B層（学力中位層）は7～8問と狭い範囲に集中しています。上位層内の差や中位層の伸長が今後の課題と考えられます。
- 領域別に見ると、表やグラフの読み取りなどの「データの活用」が比較的に高く、数量の変化や対応関係を式や言葉で整理する「変化と関係」が低くなっています。
- 記述式は、「正答率」が61.2%とあり、自分の考えをまとめた分量で書かせることで理解が表出しやすいことが分かります。一方、「短答式」や「選択式」では正答率が低く、問題文の意味等を十分に整理しないまま解答している傾向が見られ、基礎的事項の理解と即時的な判断力の育成が課題であると言えます。

中学校第1学年【数学】

(1) 平均正答数, 平均正答率

学年別 平均正答率	学年	【参考】小5	中1	【参考】中2
	知識・技能	42.8 %	4.8 / 8問 (60.6 %)	48.0 %
	思考・判断・表現	43.2 %	2.8 / 8問 (34.4 %)	25.8 %
	全 体	6.9 / 16問 (43.0 %) スコア 468	7.6 / 16問 (47.5 %) スコア 500	6.3 / 18問 (36.9 %) スコア 516

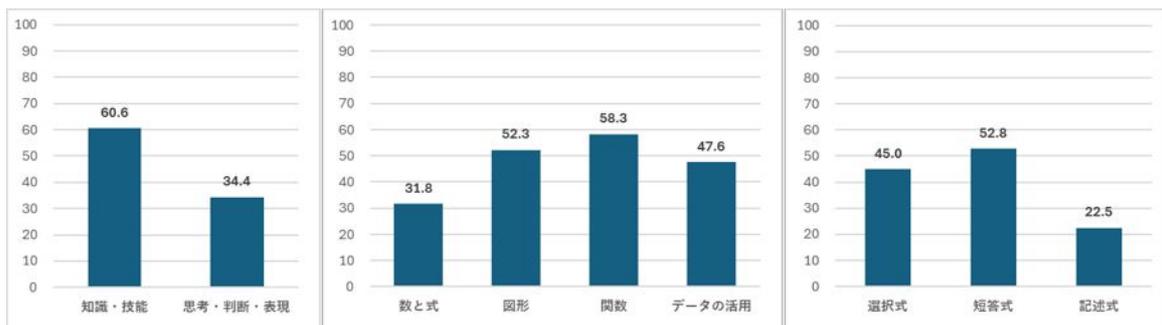
(2) 正答数分布, 正答数ごとの層分布



	D層	C層	B層	A層	県	自校
県分布	0~4問 (18.4%)	5~6問 (20.5%)	7~9問 (33.2%)	10~16問 (28.0%)	中央値	7.0
自校分布	0~ 問 (. %)	~ 問 (. %)	~ 問 (. %)	~16問 (. %)	標準 偏差	3.3

(3) 平均正答率（観点別，領域別，問題形式別）

中学校 第1学年	区分	問題数	平均正答率(%)	
			R7	自校
	全体	16	47.5	
観点	知識・技能	8	60.6	
	思考・判断・表現	8	34.4	
領域	数と式	4	31.8	
	図形	4	52.3	
	関数	4	58.3	
	データの活用	4	47.6	
問題形式	選択式	7	45.0	
	短答式	8	52.8	
	記述式	1	22.5	



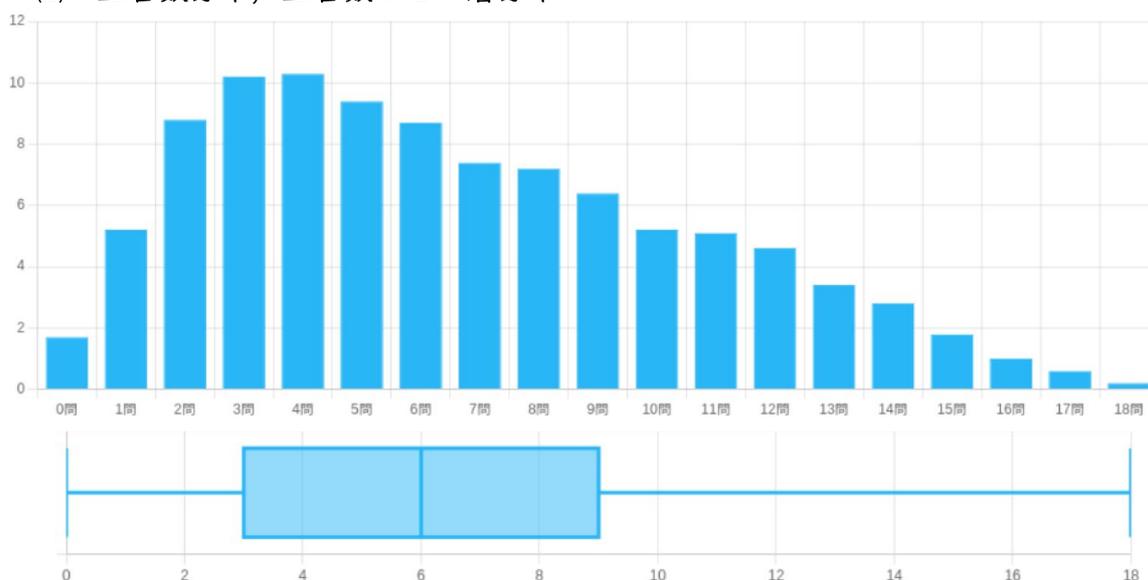
- 中学校第1学年数学の全体正答率は47.5% (7.6/16問) という結果となっています。「知識・技能」60.6%は比較的高く、基本的な計算や用語理解は一定程度定着していると考えられますが、「思考・判断・表現」34.4%は低く、根拠を基に考えを整理し、説明する力に課題が見られます。
- 各学力層の分布状況を見ると、D層（学力下位層）は0～4問に分布しており、下位層の底上げは一定程度図られています。一方、中央値は7問（全16問）であり、全体の到達状況としては更なる向上の余地が見られます。基礎的内容の理解を土台に、思考を要する問題への対応力を全体として高める必要があります。
- 領域別に見ると、「関数」「図形」は、どちらも5割を超えていますが、「数と式」は約3割という低い正答率であり、数量関係を式で表し、考察する力に課題があると考えられます。
- 問題形式別に見ると、「短答式」は5割を超え、一定の成果が見られますが、「記述式」は22.5%と正答率が低く、考え方を筋道立てて表現する力が十分に育っていないと考えられます。

中学校第2学年【数学】

(1) 平均正答数, 平均正答率

学年別 平均正答率	学年	【参考】小5	【参考】中1	中2
	知識・技能	42.8 %	60.6 %	4.3 / 9問 (48.0 %)
	思考・判断・表現	43.2 %	34.4 %	2.3 / 9問 (25.8 %)
	全 体	6.9 / 16問 (43.0 %) スコア 468	7.6 / 16問 (47.5 %) スコア 500	6.6 / 18問 (36.9 %) スコア 516

(2) 正答数分布, 正答数ごとの層分布

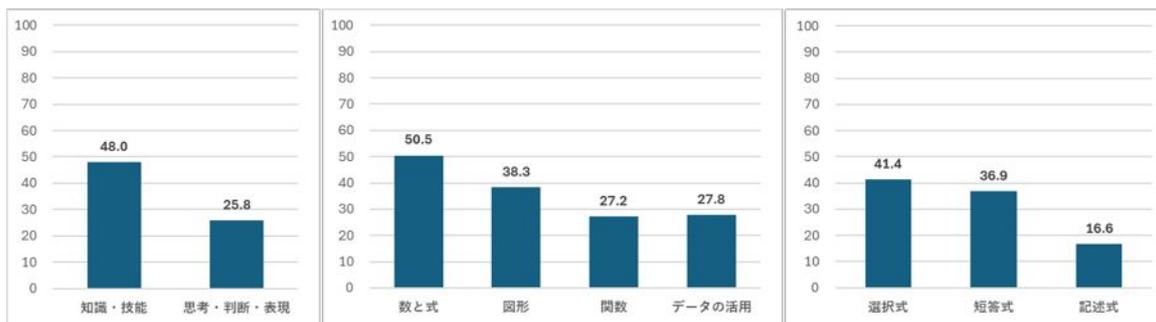


	D層	C層	B層	A層
県分布	0~2問 (15.7%)	3~5問 (29.9%)	6~8問 (23.3%)	9~18問 (31.1%)
自校分布	0~ 問 (. %)	~ 問 (. %)	~ 問 (. %)	~18問 (. %)

	県	自校
中央値	6.0	
標準偏差	4.0	

(3) 平均正答率（観点別，領域別，問題形式別）

中学校 第2学年	区分	問題数	平均正答率(%)	
			R7	自校
	全体	18	36.9	
観点	知識・技能	9	48.0	
	思考・判断・表現	9	25.8	
領域	数と式	5	50.5	
	図形	5	38.3	
	関数	4	27.2	
	データの活用	4	27.8	
問題形式	選択式	9	41.4	
	短答式	7	36.9	
	記述式	2	16.6	



- 中学校第2学年数学の全体正答率は、36.9%（6.6/18問）という結果となりました。「知識・技能」は48.0%と一定の定着が見られる一方、「思考・判断・表現」は25.8%と低い状況です。基礎的な計算や用語については一定程度理解できているものの、それらを用いて考察したり、根拠を基に説明したりする力が十分に育っていないと考えられます。
- 各学力層の分布状況を見ると、D層（学力下位層）は0～2問に分布しており、下位層の到達状況に課題が見られます。また、標準偏差が4.0であり、得点のばらつきが大きく、生徒間の差が顕著に見られます。中央値が6問（全18問）であり、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るとともに、中位層の底上げを意識した取組が求められます。
- 領域別に見ると、「数と式」は50.5%と比較的高いですが、「関数」27.2%、「データの活用」27.8%は低い結果となっています。変化や対応を捉える場面で見られ、数量関係を式・表・グラフで結び付けて考える力に課題があると言えます。
- 問題形式別に見ると、「選択式」41.4%、「短答式」36.9%に比べて、記述式は16.6%と著しく低い結果となっています。説明する力が不十分であり、途中過程を表現する経験が不足していることがうかがえます。